

令和4年度（2022年度）  
第72次 印旛地区教育研究集会  
外国語研究部 提案資料

# 「生徒の学習意欲を高める指導の工夫」

～ I C T機器の効果的な活用を通して～

## 1 研究主題

生徒の学習意欲を高める指導の工夫  
～ I C T機器の効果的な活用を通して～

## 2 学校および生徒の実態

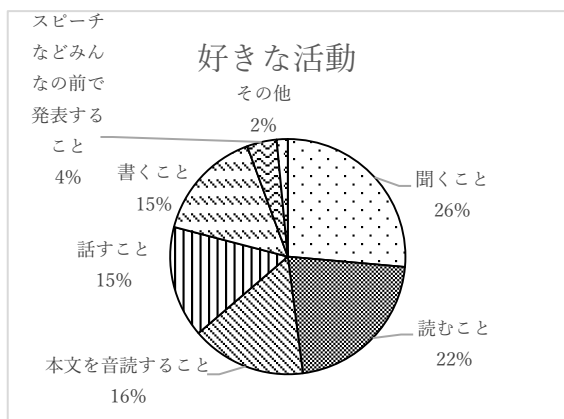
本校は四街道市(面積約 35 km<sup>2</sup> 人口約 9 万 5 千人)の南に位置し、千葉市若葉区に隣接する。最寄り駅の JR 四街道駅から約 1km にある。首都圏のベッドタウン化によって宅地化が進んでいるために少子化の影響は少なく、生徒数は年々増加している。令和 4 年度の在籍は 1 学年 228 人、2 学年 228 人、3 学年 214 人の計 670 人である。

生徒は全般的に落ち着いて学校生活を送っている。学習面では、多くの生徒が与えられた課題を着実に行うことができる。一方、受け身の生徒が多く、自分の考えや意見を積極的に発表する生徒が限られている。また、学習の基礎・基本の定着が不十分な生徒が少なからずおり、学力の二極化が見られる。

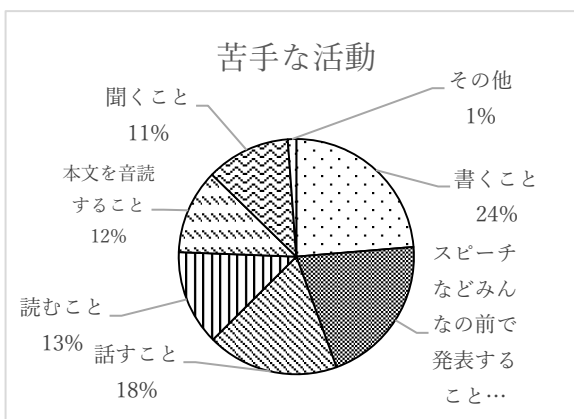
令和 3 年度千葉県標準学力テストの結果では、どの学年も 5 領域において県平均を上回っているものの、「話すこと」と「書くこと」において課題が見られる。日頃の活動においても、スピーチ発表のように人前で話すことに苦手意識をもつ生徒が多いことや、自分の考えや思いを正確に文章に表すことが難しいことが課題として挙げられる。

以下、意識調査の結果である。(2021年12月実施)

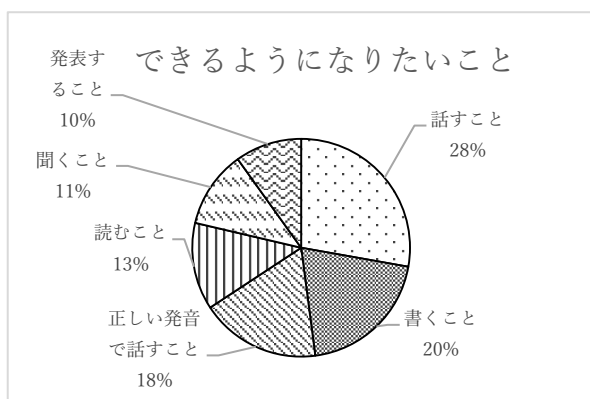
### 項目 1



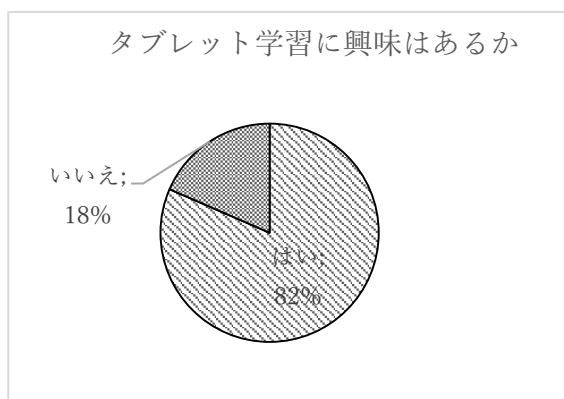
### 項目 2



### 項目 3



### 項目 4



項目1～3の回答より、多くの生徒が「書くこと」や「話すこと」に苦手意識をもっている反面、それらの力をつけたいと思っていることがわかる。「聞くこと」に関しては、比較的苦手意識がなく、小学校からの学習の積み重ねがうかがえる。また、項目4の回答より、タブレット学習に関心が高く、ICT機器の活用が生徒たちの学習意欲を高めることにつながると考えられる。

### 3. 主題設定の理由

昨今、新型コロナウイルス感染、原発問題、揺らぐ外交情勢など世界中で様々な変化が起きている。そのような状況下、学校教育において生徒自らが問題を解決して行動する力（生きる力）を育むことが求められている。新学習指導要領総則では、「生きる力」を育むために「どのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしなが、教育活動の充実を図る」ものとし、各学校において育成したい資質・能力の明確化が求められている。また、千葉県教育委員会「北総教育指導の指針」においても「社会に開かれた教育課程」の実現に向けたカリキュラムマネジメントの確立を目指す中で、「新しい時代に求められる資質・能力を明確にした教育課程の編成」について示されている。

これらを受け、四街道中学校区では「高い知性と豊かな心を身に付け、たくましく生きる生徒の育成」を教育目標とし、「よく考え、自ら学ぶ生徒」「思いやりがあり、正しく判断できる生徒」「明るく、健康な生徒」を目指す15歳の姿として設定している。その実現のために必要な生徒の資質・能力として、「自ら考え判断し行動する力」「チャレンジする力」「自他を大切にできる心」を掲げ、小・中を連携とした9年間の系統性を持たせた教育活動を行っている。

本校においても、学校教育目標「高い知性と豊かな心を身につけ、たくましく生きる生徒の育成」のもと、同中学校区が求める生徒像および資質・能力の育成を目指し、教育活動を行っている。それを受け、本校研究部では令和2年度より「より良い生き方を求め、自他を大切に、主体的に挑戦する生徒の育成～主体的・対話的で深い学びの実現を目指した多様な指導方法の工夫を通して～」を研究主題とし、各教科において研究に取り組んできた。今年度からは、これまでの研究を踏まえ、より具体的な指導を目指し「思考し表現する力を高める授業づくり～思考を深めるための手立ての追究～」を新たな研究主題としてその指導方法を模索している。そこで、本校英語科では前述の課題を基に、重点目標を「基礎・基本の定着を図り、それらをも場や状況に応じて活用する力を育む指導の工夫」と位置付けた。まずは、生徒の学習意欲を高め、基礎・基本の定着を図ることで生徒たちが自ら学習に取り組む素地を養いたい。特に「書くこと」、「話すこと」について場や状況、目的に応じて判断し表現ができるようにするため、指導者自身が授業実践の中で指導方法を工夫していく。そして、生徒自身が習得した知識・技能を活用し、思考を深めることで発展的学習につなげていきたい。以上のねらいを達成するために本研究主題を設定した。

### 4. 研究仮説

本校の研究主題に迫るため、英語科では研究仮説を以下のように設定した。

仮説① 生徒が意欲的に学びに向かえるような指導方法を工夫すれば、主体的に学習課題の解決に挑戦するようになり、自ら考え判断し行動する力が育まれるであろう。

仮説② 互いの意見を交流し、多面的・多角的に考えられるような指導を工夫すれば、自他を大切にし、より深く学ぼうとする態度が育まれるであろう。

## 5. 研究の内容と実践

### 検証のための実践 <仮説1との関連>

#### (1) 音声ソフトを活用した「聞くこと」の指導について

昨年度より生徒用デジタル教科書が導入され、生徒が個別に学習を進められるようになった。そこで、生徒の聞く力を伸ばすために授業においても音声学習を取り入れ、主体的に学習を進められるようにした。

授業では、各単元の終わりにある Listening の練習問題「Task」を活用した。生徒一人ひとりがタブレットで教科書内の「Task」を開き、リスニングの内容を聞くことができる。時間を5分間と設定し、その間各自で何度も音声を繰り返し聞いて、設問に答える。Listening の速度を変えられるので、英語が苦手な生徒や部分的に確かめたいところがある生徒は「ゆっくり」モードを選択して聞きたい箇所を繰り返し聞くことができた。(資料1) (動画)



資料1 デジタル教科書「Task」の画面  
「ゆっくり」「ふつう」「はやい」などと、速度を選択できる。

また、「Task」のように長い文の聞き取りにもかかわらず、上位生徒だけでなく下位生徒も間違いは多いものの、たくさん答えを記入している。(資料2)

#### 生徒が Listening を行った際に記入した内容 (資料2)

##### ●成績上位の生徒

聞き取ったことをメモしよう

(セラピドックを必要としている人々) お祭り、病気の人の  
場所

ペットのイヌとの選い 訓練を 受けている。

(訓練士に必要とされるもの) 時間、お金、セラピドックを 持っている。

##### ●成績下位の生徒

聞き取ったことをメモしよう

(セラピドックを必要としている人々) お祭り、病気の人の  
場所

ペットのイヌとの選い 訓練を 受けている。

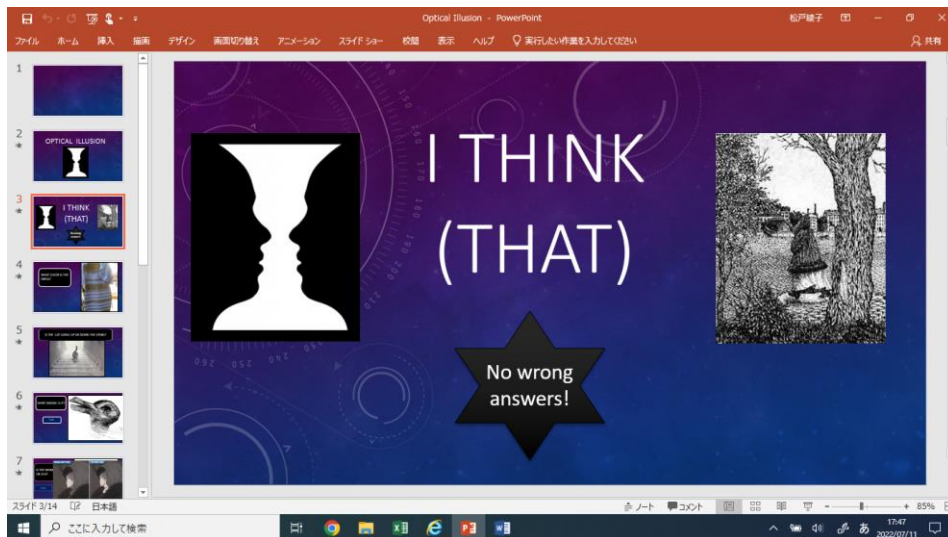
(訓練士に必要とされるもの) 時間、お金、セラピドックを 持っている。

事後に行った生徒へのアンケートでは、「自分のペースでゆっくりと聞くことができるのでわかりやすい。」「繰り返し何度も聞けるので、重要なところが聞き取りやすい。」などと答えている。生徒は自分のペースで音声学習を進めることが可能になるため、より多くの情報を理解し、進んで課題に取り組むことができた。このように、タブレットを使って生徒が個々の力に応じた学びができることにより、主体的に学習しようとする意欲が向上したと考えられる。

#### (2) 導入時における教材を工夫した「意欲づけ」について

生徒が意欲的に学びに向かえるように、大型のテレビにパワーポイントで作成したスライドを示した。文法の導入や、本文のポイントの説明にイラストや文字のスライドを見せながら生徒に

質問したり、リピートさせたりする。生徒が親しみやすく興味深い画像を見せることによって、意欲付けができた。生徒の視覚に訴えたりすることができ、顔が自然とあがるようになった。また、絵や写真と一緒に英文を提示するので、板書の必要がなく時間短縮になり、生徒の顔を見て授業をすることができた。さらに、スライドを職員間で共有し、個々で編集し使用することによって、働き方改革にもつながった。ALT が作成したスライドは、JTE の感性とは違った異文化の視点があるので、生徒はとても興味深く授業に取り組むことができた。

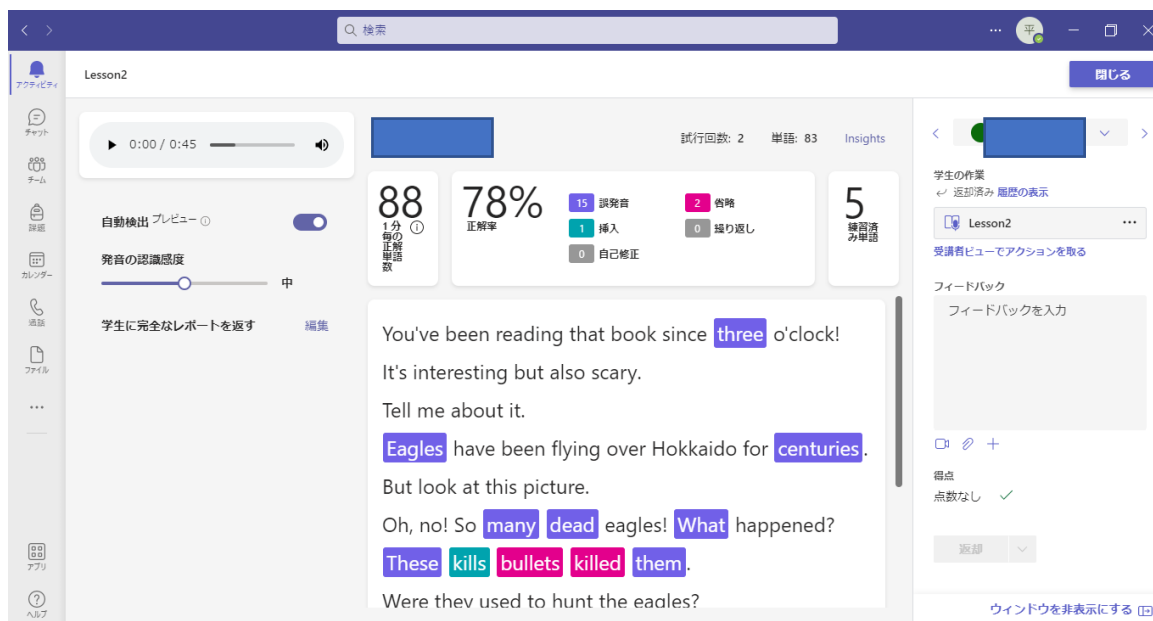


### (3) 音声練習用ソフトを利用した「話すこと」の指導について

生徒にとってアンケートの設問で「英語を使ってできるようになりたいことはなんですか。」に対し、多くの生徒が「正しい発音・イントネーションで話すこと」と回答した。このことをふまえて、生徒に正しい発音・イントネーションを身につけさせるため、一人一台あるタブレットを活用し、英語の音読練習を行った。

「Microsoft Teams」内に原稿を入力することにより、各自で音読練習やスピーチ練習を実施した。生徒の音読に対し、AI が達成率を判定してくれるため目に見えて練習成果がわかりやすく、生徒の音読することに対するモチベーションの向上につながった。普段は消極的な生徒でも英語らしく発音することを意識して練習する様子が見られた。繰り返し練習することができるため、発音が苦手な生徒でもできるまで取り組むことができた。このことにより、生徒の音読に対してのハードルが下がったと言える。一方で、授業内でこの活動を実施する際には周りの音を拾ってしまうので、ヘッドホン付きマイクがあるとより効果的であると考えられる。(資料3)

## 【Microsoft Teamsにて判定された画面】(資料3)



また同様に、正しい発音やイントネーションを確認するために CaLabo Language も使用した。生徒が自分で書いた文章を音声として吹き込む際に、事前指導として利用した。授業の中で全員の発音を個別に指導することは時間的に難しいため、この音声ソフトを使用することで生徒は個人で発音練習に楽しく取り組むことができた。

### (4) 復習の工夫：ミライシードを活用したテスト予想問題作成

生徒が学習に意欲的に取り組み、理解を深めることをねらいとし、ICT機器を活用した学習活動を取り入れた。そこで、復習を兼ね定期テスト前にテスト予想問題を「ミライシード」というソフトを使って作成した。生徒はミライシード内のオクリンクを用いて問題作成をした。その後作成した問題をクラス全体で共有し、互いに問題を解き合った。成果としては、紙媒体ではなくソフトを使うことで準備の時間を削減できた。また間違いやすい問題などを板書することなく、共有することができるので時間の効率化を図ることができた。

### 検証のための実践 <仮説2との関連>

#### (1) 導入時のペアトークの実践

学習指導要領の改訂に伴い、「やりとり」や「即興性」を意識したコミュニケーション能力の育成が英語科の指導に求められている。そこで、全学年統一で「やりとり」「即興性」を取り入れたスピーキング活動を帯活動で行ってきた。英語で話す力をつけるために、学年やクラスの実態により教科書巻末資料「アクティビティズプラス」を活用したり、オリジナルのテーマを設定したりしてペアトークを行った。

授業の帯活動の2分間で、本日のトピックを2つ与え、教師の後にリポートをしてから起立してペアで2分間トークをする。リポート練習の際に、応答例を使ってもよいし、自己表現できる生徒には即興で自分の考えを述べるように伝える。2分間のペアトークでは、挨拶から始まり、

2文以上で応えて日本語に介さずに行うことを目標とし、言葉に詰まったときには英語のつなぎ言葉やジェスチャーなどを使うように指導した。

ペアで行うことによって英語を楽しく話す雰囲気をつくることができ、毎授業開始時にいろいろな話題のペアトークを行うことができた。ペアトーク後に何組かが発表し、他の生徒のトークを全体で共有して確認することができた。英語が得意な生徒は、自分の考えをほぼ即興で伝えることができ、苦手な生徒は応答例を練習することによって英語を話す臨場感を味わいながら例文をインプットすることができた。また、この活動はALTとのコミュニケーション活動にも役立った。

## (2) 思考を深める表現活動～タブレットの活用を通して～

GIGAスクール端末の導入を受け、各教科においてタブレットを活用した学習を取り入れている。英語科においても表現活動を中心にタブレットを活用し、より効果的な指導方法を模索している。そこで、タブレット使用が始まった2年次より2年間を見通し下記のようにタスクの難易度を段階的に上げて指導を行った。

2年次	プレゼンテーション（グループ）	環境問題について
3年次	プレゼンテーション（個人）	オリジナル商品の紹介
3年次	ディベート（グループ）	学校生活に関わる論題

### 2年次

Lesson8 Water Problems を発展的に扱い、環境問題を題材としたプレゼンテーション（以下、プレゼン）を行った。本活動では、①世界で起こっている環境問題について知り、原因と解決案を考えること。②表現の仕方を工夫し、自分たちの考えや思いを聞き手にわかりやすく伝えることをねらいとし、グループ形式でタブレットによるプレゼンを行った。

表現の工夫については、日頃から帯活動でペアトークをすることで、どのように表現すれば相手に伝わるか、また、より活発にコミュニケーションをとるためにはどうしたらよいかという視点から生徒たちに考えさせながら準備を進めた。実際、プレゼン本番では、難しい表現を生徒たちが習ってきた表現に変えたり、写真やイラストなど視覚的情報を取り入れたりするなど工夫する場面が見られた。

### 3年次

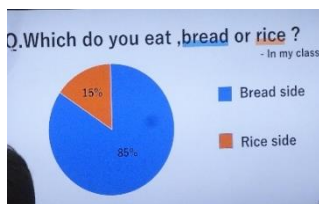
Project1「CMを作って発表しよう」の単元で、日常生活にあったら便利な商品を発案し紹介し合う活動を行った。本活動で重視したことは①原稿の工夫②スピーキングの工夫である。原稿の工夫については、グループ内での発表後、より相手に伝わる発表を目指し、文の構成や表現を再考した。スピーキングの工夫では、話す速度や間、ジェスチャーなど聞き手に伝わりやすくするための工夫を行った。

資料作成（イラスト）については、紙に描いたものを写真に取り込んだり、ペイントソフトを使ったりするなど、個に合った方法で作成した。発表時には、話し手がタブレットやTV画面で紹介しながらプレゼンを行った。

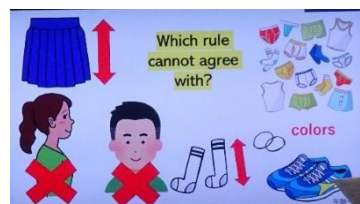
また、Lesson7 Doggy Bags を踏まえ、Project3「ディベートをしよう」を3学年全体で行った。

ディベートを行うにあたって大事にしたことは、ある事象について肯定側と否定側の両側面からメリット、デメリットを考えさせること、また、自分たちだけの考えだけでなく様々な立場になって物事を考えさせることである。

スライドの作成については、グループ内でデータを共有し、役割を分担した。英語が苦手な生徒は情報収集やスライド作成を主に行い、英語が得意な生徒は英文作成をするなどグループ内で補い合った。また、ディベートでは論証を裏付ける根拠が大事になるため、資料の提示のしかたについて、聞き手に分かりやすい提示を意識させた。そうすることで、英語だけでは理解できない生徒も、補助資料を使用することで理解を深めることができた。(資料4、5) また、生徒たちの振り返りから相手に伝わるためにはどうしたらよいか考えを深める様子が見られた。(資料6、7)



資料4ディベートのスライド



資料5ディベートのスライド

分たちの発表について	良かった点・改善点や前回に比べてよくなったこと
聞いてる人の顔を見ながら話せることができた。	
事前に話せることをもっと決めておけた。	
手と足を短くまとめた。	
資料をちゃんと集めた。	

資料6ディベートの振り返り

友だちの発表について	良かった点・改善点や今後に生かせること
考える時間が短くて、即興でやっていた。	
理由が多いと説得力がある。	
スライドのわかりやすさが大きかった。	
簡単な英語を使っていてわかりやすかった。	

資料7ディベートの振り返り

## 6. 研究の成果と課題

### (1) 成果

仮説1について：

- ・生徒一人ひとりに応じた学習指導をすることで、自ら進んで学習課題を解決しようとする姿勢が見られるようになった。
- ・ICT機器を使い提示の仕方を工夫することで、英語を苦手とする生徒が視覚的に理解しやすくなり、学習意欲の向上につなげることができた。
- ・音声学習用ソフトを使用することで個に応じた学習が可能になり、普段は学習に消極的な生徒も粘り強く課題に取り組むことができ、自ら学ぼうとする主体性が見られるようになった。



仮説 2 について：

- ・「話すこと」に関わる活動では、より伝わりやすくするために文章構成や表現内容などを相手の立場に立って工夫することで、多面的・多角的に物事を考える視点をもつことができるようになり、より深く学ぼうとする態度につながった。
- ・スピーチでは、グループ内発表を経て全体発表につなげることで、原稿を再考しより伝わりやすい表現方法を習得することができた。
- ・グループ活動では役割分担をし、協同作業を行うことで、学力の差をお互いに補いながら課題に取り組むことができた。また、生徒同士で意見を交流することにより、学びに向かおうとする意欲が高まった。

## (2) 課題

仮説 1 について：

- ・ICT機器の活用が目的とならないようにする。ICTを使用することで生徒の意欲向上、学習への粘り強い取り組みは見られるようになったが、そのことが直接英語力の向上につながってはいないと思われる。
- ・成績上位の生徒はICTを使用することで英語力の向上を感じているが、成績下位の生徒はそう感じていない。特に下位生徒の興味・関心を英語力向上へとつなげていくためには、さまざまな面から指導し、生徒自身が、学力が向上したと実感できるような手立てを考えていく必要がある。

仮説 2 について：

- ・多面的・多角的な視点をもち思考を深めるためには、定着するまでに時間がかかるため、生徒同士が共に考える活動を継続していく必要がある。